

絵本と子ども

* 本が読めるということ

きょうは、みなさんと一緒に、子どもの読書について、中でも絵本のことについて考えてみたいと思います。ここにお集まりのみなさんは、おそらくどなたも、自分の子どもが本の読める、読書の好きな子になってほしいとお思いだろうと思いますが、その「本が読める」とあるいは「本を読むのが楽しい」ということは、どういうことなのでしょう。まず、そのことを考えてみたいと思います。ふつう私たちが「本を読む」といっているのは、私たちの頭や心のどういう働きをさしているのか、「本が読める」ためには、どういう能力がなければいけないのかという事です。どなたにもすぐおわかりのように、本を読むことは、まず字を読むことから始まります。たとえば、ここに「おおきなかぶ」と

いう本がありますが、この本を手にとつて、私たちはまず「お」という字を見て、「ああ、これは「オ」という字だな」と思います。

それから、次にまた同じ字が出てくるので、これもオだとわかります。次の字は、すこし違っていて、これはキという字、その次は、ナという字だと認識します。そして、それを続けてオオキナと発音し、それが大きなという意味だと知るわけです。

子どもたちは、文字に接するまでに、すでに話し言葉と

松岡享子



「おおきなかぶ」内田莉莎子再話
佐藤忠良画 福音館書店

しての言葉、音としての言葉をもっているわけですから、本を読むためには、その音としての言葉が符号で記されたもの、すなわち文字を知る必要があります。自分たちが知っているオ、という音が「お」という符号と結びついているのだということを知り、オオキナという言葉(音)が、お、おき、など記されることがわからなければなりません。字を読むということは、音と符号を結びつける働きです。本というものは、この符号——つまり文字で書かれているのですから、本を読むためには、まず字が読めなければならぬ。字が読めるということは、本を読むための第一関門を通過するということだといえます。

けれども、この音と符号が結びつく段階、つまり字が読めるというだけの段階では、本が読めたことにはなりません。さきほどの本でいえば、「おおきなかぶ」をオオキナカブと発音できただけではだめだということです。それを、「おおきな」という言葉と「かぶ」という言葉にわけて理解して、「おおきな」というのは大きなという意味で、「かぶ」というのは野菜の一種だということがわからないといけない。そうでないといふと読めたということにはならないわけです。そのためには、大きいとか小さいとかいう概念がなければいけないし、かぶとか大根とかいふ野菜の知識もなければいけない。つまり書かれていることの内容についての知識や理解が必要になってきます。それが、本が読めるための、第二の条件です。

では(一)文字が読めて、(二)内容についての知識や理解があればそれで十分かということになりますが、それだけではないのです。たとえば、この本を開いて読んでいきますと、「おじいさんがかぶをうえました」と書いてある。あるいは、「そのかぶがとても大きくて、ひとりではどんなに力いっばいひっばってもぬけませんでした」というようなことが書いてあります。この本を読んで、ほんとうにおもしろいと感ずるためには、心の中に、おじいさんの姿や、おじいさんがかぶをひっぱるときの力のこもった感じや、どうしても抜けないで、おばあさんや孫や犬や猫を次々によんでくる状況が、読む人の心の中に、ありありと映じてくる、あるいは、まるで自分の経験のように感じられるということがなくてはなりません。

私たちが、小説を読んでおもしろいと思うのは、小説の中の人物や風景が心の中で見えてくる、そしてその人物の気持がまるで自分の気持のように感じられて、本の中で、その人の生活を生きることができからで、そうしたおもしろさがなければ、小説を読む打は半減します。この、書物の中の世界を、あたかも現実であるかのように、自分にひきつけて感じとる力を想像力といっています。本が読めて、それがたのしめるためには、この想像力がとても大事なのです。

想像力は、何も小説などのフィクションを読むのにだけ必要なのではありません。どのような種類の本を読む場合でも、想像力

のあるなしは、大きな問題です。想像力を働かすことなしに本を読んでも、その読書は通り一遍で、その人の中でも生きてこないからです。少なくとも本を読むのがおもしろい、というにはないでしょう。想像力は、本が読めるための第三の条件といえます。

以上お話ししましたように、本が読めるためには、三つの能力、三つの頭と心の働きが必要です。まず(一)字が読めること、それから(二)書かれた内容についての知識や理解があること、そして(三)想像力があること、の三つです。

* 読書力をつける三つの柱

さて、そうなりますと、子どもに本好きになってもらいたい、読書力をつけてやりたいと思えば、この三つの能力が育つようになっていけばよいということになります。

では、まず字が読めなくてはならないのだから、字を教えなくては……ということになりそうですが、ここで、ちょっと考えていただきたいのです。なるほど、本が読めるためには字が読めなくてはなりません、さきほどからいっているように字が読めること、すなわち本が読めることではありません。さきほどいった、第二、第三の能力、つまり知識や想像力がなければ、読書は成り立たないのです。そして、字が読めるということは、あとの二つと比べてみると、さほど重要でない気がするのです。少なくとも、

今問題にしている絵本の時代の子どもにとっては……です。

それは、こういうことを考えてみたらよくわかるのではないかと、思うのですが、私たちは、学校へ行けば読み書きを習います。そして、義務教育を修了するまでには、ごくわずかな例外を除いて、すべての人が字が読めるようになっています。日本は、文盲率の低いことでは、世界でも一、二位だといわれています。ところが、その字の読める人たちが、みんな本が読めるかというところではない。本の読めない子、本のきらいな子がたくさんいるわけです。

また、こういうこともいえます。ここにいる私たちは、みんな字が読めます。それならどんな本でも読めるかというところ、そうはいかない。医学や経済学の専門書はとも読めないわけです。それは書いてあることに対する知識がないからです。だから、字面は読めても意味はわからないわけで、それでは本を読んだとはいえないわけです。

また同じ一冊の物語を読んでも、ある人はそれをとてもおもしろいと思うし、別の人にはそのおもしろ味がわからないことがあります。二人とも字が読めるのに、そのような違いが生まれるのはなぜかと考えると、それは、さっきいった想像力のあるなしにかかわってくるような気がします。

こう考えてくると、ある人が本が読めたり読めなかったり、あるいは本が好きになったりなれなかったりという、その違いが出る

てくる理由は、どうも字が読める読めないではなく、第二、第三のところにあるのではないかということがわかってきます。そのところを、よく考えていただきたいと思うのです。子どもが本が読める子になるか読めない子になるかは、文字のことより、一般的な知識や意欲や、想像力のあるなしに分れ目があるのだという事です。

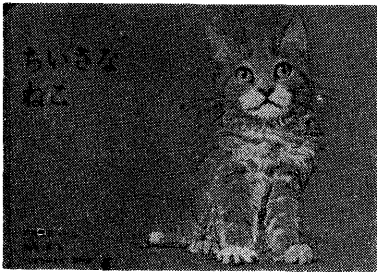
ところが、おかあさん方を見ていますと、文字を教えることにかけては、やたらに熱心な方が多いのです。図書館にお子さんを連れてきて、一緒に絵本を見ていらっしゃる。ああいいことだなと思って、ちょっとのぞいてみると、せっせと、「これ何ていう字？」ということばかりおっしゃって、お話を讀んだり楽しんでらりということをしていらっしゃらないわけです。これは、私などから見ると、とても残念なことで、かえってせっかく読書へ向かって動き始めた子どもの興味を、おさえるような結果になりかねません。ですから、どうぞ、字のことについてはあまりご心配にならないよう、それよりもむしろ、子どもの知識を豊かにするにはどうしてやったらよいか、子どもの想像力を伸ばすにはどうすればよいか、そちらの方をもっと真剣に考えていただきたいと思うのです。

* 絵本のはたらき

さて、まずそれだけのことを頭にいられておいていただいでか

ら、絵本のことを考えていきたいと思えます。絵本は、子どもが最初に出会う本だといわれ、絵本の時代は、読書の入門期だといわれていますが、どういうわけでそうなのか、また、さきほどから申し上げている読書を支える三つの柱のような頭と心の働きを、絵本がどのように助けているか、その辺のところを見ていきたいと思えます。

この絵本は、「ちいさなねこ」という絵本ですが、一頁目を開いてみると、「ちいさなねこ、おおきなへやにちいさなねこ」と、書いてあります。これが本ですと、ただ活字で、これだけの文章が書いてあるだけなのですが、これは絵本なので、この通り、大きなへやに、小さな子ネコがポツンとすわっている絵が、文章と



「ちいさなねこ」石井桃子さく
横内襄え 福音館書店

いっしょに、ちゃんと画かれています。絵があるから絵本だというのは、当たり前のことなのですが、幼い子どもにとっては、この絵があるというところが、実は、とても大事なことです。

もし、絵がなかったとすると、私たちは、頭の中で、大きなへやにいる小さなネコのことを思い浮かべるわけです

が、これは抽象的にものを考えるということです。つまり、實際目の前に大きなへやがあつて、そこに子ネコがいるわけではないのに、頭の中だけで、それを考えるわけです。こういう抽象的なものごとをとらえる力というのは、人間だけに与えられた高度な能力なのですが、この能力は、生まれたときから備わっているものではなく、だんだん養われていくものなのです。そして、そこへ行きつくまでの段階として、私たちは、絵でものをとらえるという段階を通らなければならないようにできているのです。

たとえば、このネコですが、私たちは、まず現実の生活の中で、ネコという動物を見、それにふれて、ああこういう生きものであるなどという認識をします。そして、子どもの場合、その場でおとなが「あれはニャアニャアよ」などというのを聞いているわけです。そして次に、たとえば、こういう絵を見ますと、自分からニャアニャアなどといったります。つまり、これはネコの絵であつて、ネコそのものではないわけですが、それを見た子どもは、あたかもほんもののネコを見たと同じ反応を起こして、ニャアニャアだと認識する。つまり、抽象化への第一歩を踏み出したこととなります。

そして、その次は、こうした絵を手がかりに、ネコというものについて認識を深めていきます。これはネコという名だとか、ネコにもいろいろな種類や大きさがあるということなどをです。そうして、絵をくりかえして見ていくうちに、ネコという言葉と、

ネコという動物についての知識がだんだん結びついてきて、もはや絵が与えられなくても、ネコという音を聞いただけで、あるいはその音を代表する「ねこ」という文字を見ただけで、頭の中にネコを思い浮かべることができるようになる、つまり抽象的に考えられるようになるわけです。こうなつて、はじめて文字による伝達が可能になるわけですが、子どもたちはそこへ行くまでに、どうしても絵で実物におきかえて物事を認識するという段階を経なければいけないのです。その意味で、文章の内容を、具体的にを見せてくれる絵本の絵というのが、子どもにとって大変重要になってくるのです。

子どもたちは、文字に行くまでの途中の段階として絵を見ているだけではありません。その段階で、自分が現実の生活の経験を通して得た知識を整理するという働きもしているのです。それはどういうことかといいますと、たとえば、ある子どもが現実を知っているネコは、トラネコと三毛ネコだけかもしれないわけですが、その子がまっ黒のネコの絵を見て、ニャンニャンといったとすると、絵のネコは、たまたまその子が実際に見たネコとは違っているにもかかわらず、それは犬ではない、ウシでもウマでもない、ネコに共通の性質を備えているということを子どもが認識したということなのです。犬についても同じことがいえます。シェパードとスピッツでは、一見したところずいぶん違うようだけれども、それはひっくりかえして見ていくうちに、ネコという言葉と、

の特質があるのだということを学んでいく、そういう働きを、子どもたちは絵を見ながら、ひとりりでやっていくわけで、絵本の絵は子どもたちが、実生活で得た経験や知識を再確認し、整理するの役に立っているのです。

ごく幼い子ども、一歳半か二歳ぐらいまでの子どもは、このように、自分の知っているものを絵本の中に見つけて喜ぶということがせいぜいで、絵本の絵を通して、自分が実生活の上では知らないもの、そのことを認識するところまでは行きませんが、三、四、歳になるとそういうことができるようになります。象という動物を実際見たことがなくても、象の絵を見てその名前を覚え、かえって、動物園で象を見るという実際の経験があとになっても、「あっ、あれは象だね」と、すぐわかるようになるわけです。こうすると、子どもたちは、絵本の絵を手がかりに、知識——さきほど、読書の第二の柱にあげましたが——その知識をふやしていくことができるようになります。

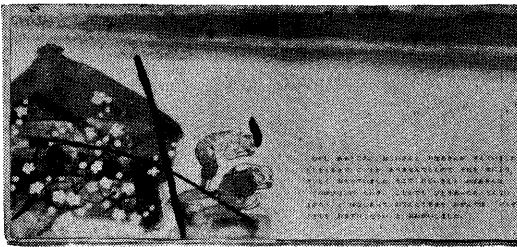
このことは、昔話とか、外国の物語とか、子どもが、実生活では知ることのできない世界のことを扱ったお話については、特に大切になってきます。そういう世界についての知識やイメージは、絵を通してでなければ得ることができないからです。

「むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがすんでいました」というふうな日本の昔話ははじまる場合が多いのですが、おじいさんおばあさんといったとき、子どもはいったいどんな

なおじいさんおばあさんを思い浮かべるでしょうか。子どもが現実の生活でおじいさんおばあさんと呼んでいる人は、もしかすると、まだ五十代の元気な方で、おじいさんは背広を着て会社に、おばあさんも洋服を着て自動車など乗りまわしているかもしれません。そういうおじいさんおばあさんしか、思い浮かべることでできないとしたら、「おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに」といった物語を、心の中で絵にして組みたてていくのに、非常におかしな具合になってしまいます。

日本の昔話のいわゆるおきな、おうなどといったおじいさんおばあ

さんのイメージや、川の流れて洗濯をするようす、あるいは臼、きねといった昔話に出てくる道具など、絵本の絵があつて、はじめて子どもたちもイメージをもつことができるようになります。そして、そのような絵本であるこの*「いっすんぼうし」を読んだ子どもは、この絵を手がかりに、ほかの昔話を聞いたときも、自分でイメージをつくれるようになります。そうなるとお話を聞いてもおもしろいということになるわけです。*



「いっすんぼうし」石井桃子文 秋野不矩絵 福音館書店



「ねむりひめ」グリム作 瀬田貞二訳 ホフマン絵 福音館書店

た場合でも、きっとそのイメージは、生きてくるのではないでしょう。絵本は、このように子どもたちの知識を豊かにし、文学の世界のイメージを作る土台を与えてくれるわけですが、さらに、子どもの想像力を刺激して、それを伸ばす働きももっています。つまり、第三の柱を支える役もするということです。

たとえば、ここに「もりのなか」という絵本があります。これは小さな男の子が紙の帽子をかぶり、らっぱをもって、ひとり森の中へ散歩に出かけるというお話です。そして、ライオンやク

むりひめ」を見ながら、このお話を聞いた子どもは、この絵に助けられて、ほかのグリムのお話を讀んだときにも、お城のようすや王さまやお姫さまの姿を自分なりに思い浮かべることができるようになり、あるいはもつとずつと大きくなって、ドイツの古い文学を讀むようになって、



「もりのなか」マリー・ホール・エッツ文・絵 間崎ルリ子訳 福音館書店

は、幼い子がひとりで森へいったり、ライオンやクマと遊んだりということ、あり得ないことですから。けれども、この物語が、こうして、白黒のおだやかな、けれどももしっかりした絵に表わされて、こういう絵本の形で子どもたちに与えられますと、子どもは、まるで、自分がこの小さな男の子になったつもりで、物語を楽しみます。絵本を讀んでいる間、子どもは想像の世界の中で生きていくわけです。この森の木の黒いかげなど、じっと見ていますと、このかげにも何か別の動物がかくれているのではないかと、それがひょいと出て来そうな、そんな感じがしますね。この絵には、私たちにそう思わせるような雰囲気があります。私たちの想像力を刺激する力があります。

マヤ象やサルなど、次々にいろいろな動物に出会い、それがみんなぼくの散歩についてきて、こうやって行列を作って森の中へどんどんはいつていく。そして、森の中の空地で、ハンケチ落としやロンドン橋落ちたをして遊んだり、アイスクリームを食べたりするのです。これは、想像上の世界の出来事です。現実には

もともと、子どもは、空想力があって現実と空想の世界に、はつきりした線をひいていないのがふつうです。そしてこの空想力は世の中のこといろいろなわかつてきて、物事の因果関係とか、法則とかいうものがわかつてくると、だんだん前ほど自由には働かなくなり、遂には、空想したりすることを、とりとめないとか、地に足がついてないとかいって軽蔑したりするようになってしまいます。

人間のほかの能力は、だいたい年とともに成長していくものですが、空想力は、むしろ子どもときにはあつておとなになるにつれて枯れていくものようです。この空想力は、想像力の母胎といつてもいいでしょう。この二つの言葉は、ほとんど同じような意味に使われることもあります。ここでは、空想力は、夢みたいなこと、とりとめのないことまで含めた広い意味に考え、想像力は、世の中の道理や法則がわかつて、それだけでつぶされてしまわない、もっと根のある、しっかりした心の働きとでもいうふうな考えて下さったらいかと思えます。

ちよつと話が脇道へそれますが、この想像力というのは、人間のもっているいろいろな力の中でも、いちばん素晴らしい力なのではないかと私は思うのです。想像力のない人は、現実における人を取りまく世界から、一步も外へ出ることができないのですから、その世界が変われば変わったように、いつもまわりに規制されて生きていくしかありません。つまり、その人らしき、個性と

いうものを生かして生きることができなくなります。

想像力のない人は、窓のないへやの中へとじこめられているようなものではないでしょうか。自分だけのせまい世界から抜け出すことができないのですから。想像力は、現実の世界からより広い世界に出ていくための翼のようなものといったらいいでしょうか。

それは、何も文学的な才能ではなく、科学の世界にも想像力は必要です。未知の世界に思いを馳せたり、こういうときにこういう薬品を使うとどうなるだろうかといった仮定の問題を考えるのも、みな同じ心の働きだからです。学問や芸術の世界だけでなく、日常のごく小さな問題でも、たとえば行詰ったとき角度をかえて問題を眺めてみるとか、他の人の立場に立って考えてみるとかいうのも、私は広い意味での想像力だと思ふのです。

現実の世界、目に見える限りの世界にとらわれることなく、その人がその人らしく生きるために、この力は大切にしなければいけないと思えます。

* よい絵本とは？

さて、絵本のこと話をもちますが、本への入口として、絵本が、どのような役割を果たしているかわかりただけだかと思いますが、さてそういう絵本の大切な役割を考えますと、絵本の選び方ということが問題になってきます。そうした役割を立派に果たしてくれる絵本でなければ困るからです。

さきほど、子どもは、絵本の絵によって、自分たちが実生活で得た知識を再確認し、整理すると申しましたが、そういうことができるためには、絵本の絵というものは、物の形を正しく伝えるものでなければ困ります。動物の絵ひとつにしても、どれもこれもぬいぐるみのおもちゃのように、ただかわいらしいだけでは困るのです。馬なら馬、犬なら犬の形を正しく伝えること、またそれらの動物の性質なども、よくわかるようなものでなければなりません。甘くくずした、かわいいかわいひ絵は、決して子どものためにはいいものではないことを、知ってほしいと思います。

また、子どもは絵本の絵を手がかりに、自分の知らない世界の物語のイメージを作るということを申しましたが、そのために絵本の絵は、昔話なら昔話、外国なら外国の風物や雰囲気をも正しく伝えてくれるものでなければなりません。アメリカで出版された日本の昔話の本のさし絵を見ますと、どうもアメリカの画家の人は、中国と日本の区別がつかないらしくて、浦島太郎が弁髪だったりすることがあるのです。そういうのを見ると、ずいぶんおかしかったり、腹が立ったりするわけですけれど、それと同じようなことを、私たちも外国の物語についてしているのではないでしょう。グリム童話の絵本など、ずいぶんいいかげんなものが出ていて、国籍も時代も不明で、もし、ドイツの人が見たら、これがグリムかと驚くだろうというようなものがたくさんあります。

ホフマンのようなしつかりした絵ですと、さつきもいったように、その絵で養われたイメージが、将来にわたって、その人が文字に親しむ助けになります。いいかげんなもの、何もかも同じようなマンガふうにくずしたものを最初に見てしまうと、その時、正しいイメージが得られないばかりでなく、将来、もっと本格的な文字を読むときになって、はじめからイメージを作らねばならない。あるいは、イメージを作るために、これまでもっていた間違ったイメージを打ちこわしてかからねばならないということになります。

絵本から子どもが吸収する知識やイメージは、子どもの時代だけでなく、将来にわたって影響があるものですから、心して選ばなければいけないと思います。

また、さきほど「もりのなか」を例にあげてお話ししたように、絵本の絵は、子どもの想像力を刺激する、あるいは子どももっている想像力に確かな後だてを与えてくれるものでなければなりません。「シナの五にんきょうだい」の絵本を何人かの子どもに読んでやっていますと、いちばんめのおにいさんが海の水をぜんぶ口の中にふくんでいるというところで、必ず、自分も口をぶつつとふくらまして絵をみている子がいます。この絵を見ていると、海が口の中でもりもり上がってくる……などという感じが、ひとりでにしてくるからでしょう。この絵は、そのように、見ているものをお話の世界——想像上の世界へ引きこんでいくだ

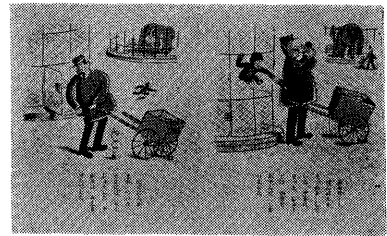
けの力があります。

また「ぞうさんばばーる」を見ていますと、象の子どもが、百貨店へ行って背広を買ったり、記念写真をとったりすることが、何の不思議もなく、たのしく受けとれます。物語と絵がとけあつて、しっかりと一つの世界をつくりだしているからです。

ふつう私たちが、本屋さんだけでなく、おもちゃ屋さんや駅の売店などで目にする物語絵本には、ぬり絵のような、個性も動きも全然ない絵に、べったりすみからすみまで色をつけてあるものがほとんどですが、ああいう絵は、子どもを話の中へ引っぱりこむ力はありませんし、子どもが自分の想像力を働かす余地もありません。想像力の豊かな人のかいた絵は、決して子どもをその中に閉じこめることはなく、さらに見る人自身の想像力を働かす余地ときっかけを与えてくれるものなのです。

ここでひとつ、おかあさん方が、絵本の絵について、よく抱いていらっしゃる間違つた考え方についてふれておきたいと思うのですが、その一つは、子どものための絵は、写実風な絵でなければいけないだろうということで、いま一つは、子どもの絵には明るくはでな色がついていた方がいいということです。

写実風というのは、たとえばこういうような「ちいさなねこ」のような絵をいいます。しかし、子どもがどんな絵本を喜ぶかということを観察してみると、子どもが喜ぶものが必ずしも、この種の絵だけに限られているというとはいえません。子どもたち



「ひとまねこざる」 H. A. レイ 文・絵
岩波子ども本

が大好きな「ひとまねこざる」の絵は、マンガふうの絵です。「どろんこハリー」もそうです。

「ぐりとぐら」や「しょうぼうじどうしゃじぶた」も、子どもの好きな本ですが、それぞれ絵のタッチは違います。

極端な例をあげれば、「あおちゃんときいろちゃん」という絵本があります。これは、ごらんのと

おり、いろがみをちぎってはりつけた絵で、あおちゃんといつたところで、手足はもとより、目鼻も口もありません。家や学校や、公園も具体的には何にも描かれていません。それを暗示するようなものが示されているだけで、おおよそ写実からかけはなれた、抽象的な絵です。ところが、この絵本を子どもは喜んで見えています。それは、この物語がおもしろいからですし、また、単なるまるくちぎった紙でしかないあおちゃんやきいろちゃんに、しかし何ともいえない人らしさといえますか、個性が感じられるからだろうと思います。

色についても同じことがいえます。「一〇〇まんびきのねこ」や「いたずらきかんしゃゆうちゆう」は子どもたちに人気のある絵本ですが、色はついていません。「ねむりひめ」や「しろい

うさぎくろいうさぎ」などは色はついていますが、非常に地味な、ひかえ目な色です。でも、だから、これらの本が、にぎやかな色の本より、子どもたちにとって魅力がないのかというと、そうではなさそうです。

こういうことを考えてみると、絵本の絵の色のあななしや、絵のスタイル、手法などは、子どもに絵本を選ぶ場合、あまり考える必要はなさそうだとわがわがわかります。これまで見てきただけでも、ずいぶんスタイルの違う絵がありました。絵本の大きさや形もまちまちでした。でも、それは、大事なことでなかったのです。それは、絵本を選ぶときのきめ手にはならないのです。

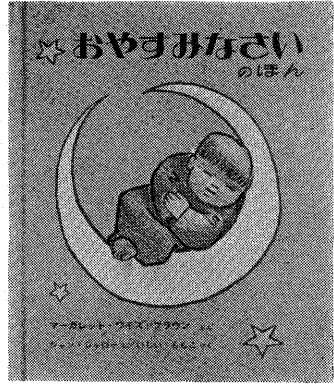
では、何がいちばん大事なのでしょう。ここにあげたような絵本を、よく見ていけばわかると思いますが、大きさも形も色も絵のスタイルも違うこれらの絵本に、共通していえることがいくつもあります。一つは、これらの絵本は、どれもストーリー、話の筋立てがしっかりしておもしろいことです。いま一つは、どの絵も、子どもに何かを語りかけるような、絵だけ見ているいろいろなことがひとりでにわかってくるような、そんな絵だということ*です。「ひとまねござる」の絵を見てください。知りたがりやでいたずら好きの主人公の性質がともによくわかるじゃありませんか。「あおい目のこねこ」を見てください。くわしくお話を読まないまでも、楽天的で、どこか飄々としていて、ちょっ

と茶目ツ気のあるネコだということが、何となく感じられるではありませんか。

これらの絵本の絵は、文と一体となつて、あるときは、文より一層雄弁に、物語や、主人公の気持や、話の雰囲気語っています。字の読めない子どもには、絵の語りかけが、決定的な力をもつています。ほんとうの絵本というのは、文の助けを借りなくても、かなり正確に話の筋や雰囲気がかかるものです。ために、「ちいさなおうち」を、字を読まずに、じっと絵だけ見ていってごらんください。どんなにいろいろのことがわかってくるか……話の筋だけでなく、平和な田園にあつた小さなお家が、まわりに高層建築が立ち並び、地下鉄や高架電車が走り、落着きも安らぎもなくなつて、大都会の非人間的な圧力につぶされそうになるその気持が、痛いほどよくわかります。こういうのが、ほんとうに絵本らしい絵本なのです。

この意味で、いわゆる名作絵本といって、「宝島」だの「ガリバー旅行記」だのとといった、本来もつとも大きい子どものための長い物語の何場面かを絵にしたような絵本は、絵本とはいえないものです。絵本を選ぶときは絵をよく見て、それでかなりのところまで物語がたどれるかどうか、絵が何かを語りかけてくれているかどうかという点を見きわめていただきたいと思ひます。

* 絵本の読み聞かせ



「おやすみなさいのほん」マーガレット・ワイス・ブラウン文 ジャロー絵 石井桃子訳 福音館書店

きょうは、絵本の絵のことに
ついてお話し
しましたが、絵
本の文も決して
事でないわけ
はありません。
絵本というもの

は、くりかえし読むものですから、子どもが丸暗記してしまうことが多いのです。ですから、美しい、正しい言葉で書かれていること、生き生きとした、音としてもたのしいひびきをもった言葉であることは大切なのです。この点は、くわしくは話しませんが、たとえば、「かばくん」や「おやすみなさいのほん」、あるいは「きかんしゃやえもん」など、声に出してお読みなれば、言葉のひびきや、おもしろさについて、いろいろお感じになるのではないかと思えます。

きょうは、ひとつお願いかたがた申しあげますが、絵本というものは、もともと、おとなが読んであげるものだということを知ってほしいと思えます。

字が読めない子には、もちろん読んでやらないことにはどうしようもないのですが、少し字をおぼえはじめると、途端に読み聞かせをやめてしまうおおかあさんが多いのは困ったことです。絵本

などというのは、もともと子どもが読むものではない、親が読み聞かせるものだからに思ってしまうのです。これには、いくつもの理由がありますが、まず、この年ごろの子どもにとっては、字を読むことは大変な負担だということです。拾い読みをはじめた子どもが、本を読むのをそばで聞いていますと、「ボ・クノハ・ナハ・キイロデス」といって、しばらくして「ぼくのはなは、きいろです」といいなおしたりしています。そして、やっと、「ぼくの花は黄色です。」という意味にたどりつくのでしょうか。これは、子どもにとっては、たいへんな作業です。声に出して読むのに一生懸命で、読み終わっても、何が書いてあったのか、てんでわかっていないというのもめずらしくありません。

本を読むことのほんどうのおもしろさは、意味がわかったあと、その物語なら物語を、心の中で再現して味わうところにあるわけなのに、そこへたどりつく前に、エネルギーを使い果たしたといった状態になっているわけです。それでは、本を読むのは楽しみではなくて、苦しい作業で終わってしまいます。おとなが読んでやることによって、この作業から解放してやると、子どもは精力を集中して、物語を楽しむことになりやすから、物語の世界がよくわかって、楽しみもたっぷり感じとれるわけです。

また、おとなに読んでもらうと、かなり程度の高いものまで理解することが出来ます。たとえば、この「きかんしゃやえもん」などは、自分で読むとしたら、小学校一年の終わりか二年のはじ

めということになりましようが、親が読んでやると、三歳や四歳の子でも喜んで聞きます。ということとは、読んでもらってわかるものと、自分で読めるものとの間に、三年くらいの差があるということとです。この差は、かなりながく、小学校の高学年になるまで続きます。

よく、子どもに絵本を選ぶのに、「ああ、それは字が多すぎて、あなたには無理ね。」「これなら、字も少なく、あなたでも読めるでしょう。」などと、子どもの字を読む力に合わせて本を選んでいらっしやるおかあさんを見かけますが、これは、大きな間違いです。今もいったように、子どもが耳から聞いて理解する力と、自分で読む力との間には、三年くらいの開きがあるわけですね。ということは同じひとりの子どもがもっているさまざまな能力の中で、字を読む能力というのは、必ずといってよいほど、能力の幅の中で低い方に位しているわけです。だから、耳で聞くなら、相当こみいった長い話でも、けっこう楽しんで聞ける子ども、いざ自分で本を読むとなると、「わんわん こいぬ。」とか「ことりがなくよ、こえだけでなくよ。」とかいった、簡単な、たあいもないのしか読めないということになります。

そういうものは、その子をわくわくさせたり、心からたのしいと思わせたりするだけの内容はありませんから、そういうものばかり読んでいると、物足りなくなり、本を読むことがつまらなくさえなります。ところが、おかあさんが、内容的に自分を満足さ

せてくれるお話や絵本を読んできれすと、子どもはそれを楽しむだけでなく、自分も字がすらすら読めるようになって、早く読めるようになっていたいという気持ち湧くし、本の世界の奥行きといえますか、そういうものも感じられて、本というものはおもしろいものだという信念も育つと思います。

あなたは字が読めるからといって、子どもに読ませるだけにしてしまうと、非常に能力のある子は別として、内容的には、その子にやや喰い足りないところでお茶をにごすことになるのです。子どもというものの最大の特徴は、「成長しつつある」ということにあるのではないかと思いますが、その成長しつつある子どもは、低い方の能力に焦点を合わせて本を選ぶのは、愚かなことではなんでしょうか。洋服でさえ来年も着られるようにと、成長を見越して余裕をもたせてつくります。子どもの本も、子どもの成長を見越して、子どもがそれに届こうとして伸びていくようなものを選ぶのが当然でしょう。とすれば、字が多い少ないにこだわってではだめで、文字の多いところは、親が読んでやることを前提として選ぶようになってください。

親が読んでやることの意味は、ほかにまだまだあります。生活経験の豊かな親は、子どもにくらべれば、ひとつの物語なら物語から、より多くのものを引き出してこられるはずで、子どもが感じとれないおもしろ味も、おとなは感じるができるとい

ったこともありましょう。そうした親の文学の鑑賞力といえますか、解釈といえますか、そういうものは、読んでやる声の調子の中に、ひとりでにじみでてくるものなので、子どもは、そうした味わい方というようなものも、親から本を読んでもらっているうちに知らず知らず身につけていきます。ですから、自分でひとり立ちして読むようになった場合、深く読みとることができるようになるでしょう。

読んでやると、なまけぐせがついて、自分で読もうとしなくなると心配なさる方がありますが、私は、少なくとも、小学校五年くらいまでは、あまりそういう心配はなさらず、どんどん読んでやっていただきたいと思います。小さいときからたっぷり読み聞かせをしてもらったお子さんは、たとえ自分で読みはじめるのがおそくても、いったん読みはじめると、とてもはやく高い読書の段階に到達するようです。「読んでやるのはよいけれど、あまり同じものをくりかえしくりかえし読まされるので、うんざりしてしまつて……」という声をよくききます。子どもの方は、同じ絵本で、文章もすっかりおぼえていても、読んでもらうたびにうれしそうですが、親の方は、くりかえしのたびにたいくつになっていくということは確かにあるでしょう。でも、子どもは、なぜその同じものをくり返し要求するかということを考えてみると、そうしてくりかえし味わって自分のものにしていくのが、子どもがものを吸収する自然の方法だということ、もうひとつ、そうい

う形で、親の愛情を確かめ確かめ、そこに安心感を抱いているのではないかということが考えられます。夜、寝る前のひととき、お腹もすいていない、お風呂にもはいって身体もさっぱり気持がよい、何の心配も不快もないとき、自分のいちばん好きな人のそばにいて、あるいはひざにのって、自分の大好きな絵本を読んでもらう、何べんも聞いたあの声、あの調子、何もかも子どもにとっては満足のいく幸せな経験です。子どもにとって、これほど満ち足りた思いが味わえる時間というのは、そうないのではないのでしょうか。親と子が心を通い合わせながら一冊の本を読む、その楽しい経験が、そのまま読書への道となるのですから、それほどいいことはありません。

年齢が進めば進むほど、本の世界に入るのはむしろかしくなります。幼児の時代に絵本を通して、読み聞かせを通して本の世界に入るのが、いちばんの近道で、しかも、いちばん楽しい道です。このことを知っていただいて、どうぞお子さんのために、よい絵本をえらび、読み聞かせをしてくださるようお願いをして、きょうの話を終わりにいたします。

松岡享子氏は、図書館学を専攻し、アメリカで図書館に勤務した後、大阪市立図書館・小中学生室に勤務した。現在は、子どものための話の創作・翻訳をなさるかたわら、自宅で文庫を開いておられる。これは幼稚園児の母親のために講演されたものである。